

連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

B6判
三五二頁
三五〇〇円
連句の実作・鑑賞・研究に
必須の知識をすべて網羅！
初心者から研究者まで使える
本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三二四語を選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越
思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字
景気 五句目 差合 去 式目 四春八木
〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋
鶴沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山
高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

俳句鑑賞辞典

水原秋桜子編 二三〇〇円
貞徳・宗因から現在活躍中の俳人
まで二七〇人の古典的かつ伝統的
な名句一〇〇〇句を収め、豊かな実
作の経緯を生かした句作にも役立つ

現代俳句鑑賞辞典

水原秋桜子編 二八〇〇円
結社や傾向にとらわれず現代の代
表的な俳人五〇五人の代表作一四
六八句を収め、公平に客観的に鑑
賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

季語辞典

大後美保編 二八〇〇円
日本の季節にまつわる言葉やスモ
ッグ・不快指数などまで収録し、
春夏秋冬の四季に分類した。気象
学者の立場から厳密に季節を分類

難解季語辞典

中村俊定監修 四五〇〇円
古典俳句に使われる季語は今日で
は意味や表記が難解で正しい解釈
や鑑賞ができない。本書はそれら
の季語二千語を収め、解説を施す

連句 第16号 季刊



- 国語学大辞典 B5 一九〇〇円
- 国語慣用語大辞典 B5 六八〇〇円
- 国語慣用語辞典 B6 白石大二編 二二〇〇円
- 国語史辞典 B6 林巨樹他編 二二〇〇円
- 日本語語源辞典 B6 堀井幸以他編 二二〇〇円
- 京都語辞典 B6 井之口畑井編 一八〇〇円
- 擬音語擬態語辞典 B6 天沼幸雄編 二二〇〇円
- 隠語辞典 B6 榎垣実美編 二二〇〇円
- 近世上方語辞典 A5 前田勇編 一五〇〇円
- 花柳風俗語辞典 B6 藤井紫哲編 二二〇〇円
- 明治新語俗語辞典 B6 藤井紫哲編 二二〇〇円
- 難訓辞典 B6 中山善忠編 二二〇〇円
- 名乗辞典 B6 荒木典雄編 二二〇〇円
- 名数数詞辞典 B6 藤原謙編 二二〇〇円
- あいさつ語辞典 B6 奥山益朗編 二二〇〇円
- 新版 ことば遊び辞典 B6 鈴木實三編 二二〇〇円
- 類語辞典 B6 鈴木實三編 二二〇〇円
- 類義語辞典 B6 徳川幸徳編 二二〇〇円
- 表現類語辞典 B6 藤原与一他編 二二〇〇円
- 新版 文章表現辞典 B6 神橋一利他編 二二〇〇円

東京堂出版

101東京都千代田区神田錦町3-7

電話03-233-3741-2

政子石（南柏雜記 14）…………… 1
 連句に愛着する……………山田みづえ… 2
 「市中は」の巻鑑賞（Ⅱ）……………東明雅… 6
 歌仙 歳の瀬……………草間時彦捌… 10
 捌きの心得……………名古屋則子… 12
 暮雨巷のこと……………式田和子… 15
 校合の限界……………杉内徒司… 16
 電通会連句部作品……………山口美恵… 18
 新年……………吉田憲助 初懐紙……………秋元正江
 絶頂の城……………東明雅… 20
 第20回猫蓑会 二十韻 六卷…………… 22
 元日や…市野沢弘子 雪吊……………山口みづえ 大寒や…中島啓世
 初懐紙…秋元正江 初塚……………福井隆秀 初富士…桜井天留子
 七騎の会作品 神田川の巻……………大畑健治… 24
 （第一次稿・第二次稿・決定稿）
 連句教室 冬ぬくし……………東明雅 石露……………杉内徒司… 26
 一月の床……………東明雅 初筑波……………杉内徒司… 27
 二十韻 秋桜・年はじめ……………東明雅捌… 28

新刊紹介	草間時彦著「夜咄」…………… 5	金子恭子著「祭宿」…………… 5
	杉江杉亭著「井の頭集」…………… 17	知足庵一海著「やせ蛙の旅」… 17
	自解百句選「山田みづえ集」… 3	金子兜太著「皆之」…………… 17

雁帛往来・連句会案内…………… 29

表紙（猿猴）宮崎龍火子

政子石

南柏雜記 14

雅

私の師匠根津芦丈翁は、九十歳になつてはじめて雑誌の編輯を習い、連句専門誌「山襖」を創刊、二十四号まで出して昭和四十三年九十五歳で逝去された。その「山襖」第七号に「恋句あれこれ」というエッセイが載っている。原文を左に引用する。

政子の石のぬくき人肌

膝など濡らして給へと稚子を抱き
 鶴が岡八幡の境内にあった女陰石である。あまり女陰に似て居る処からか、何処かへ移して今は八幡様の境内にはないとのことだ。

この一連は児を欲しい人と、安産のお礼参りの人とが落ちて、マア佳い赤ちゃんだ、一寸私に抱せてと頼む、その赤ン坊に「オシッコをして膝を濡らして給へ」と呼びかける。其姿に対し赤ン坊の母親は勿論父親も、にこにこし

て見て居るさまである。猶「給へ」の一語でこの両者の人柄も、立派な人々であることが知られる。
 赤ン坊に尿で濡らされると、子供が出来るとの迷信は今もある。美しい恋句である。

この政子石のことは、この文章を読んだ昭和四十年から、私の頭の隅のどこかにこびりついていた。たまたまこの一月下旬、逗子の本屋良子さんのお宅に招かれ、鶴が岡八幡に大勢の人と寒牡丹を見に行く機会に恵まれた。私は寒牡丹と冬牡丹とは同じものだとばかり思っていたが、親切な園丁さんがその差を実物ではっきり教えて下さったのはありがたかった。簡単に言えば葉が沢山ついて花も多くなっているのが冬牡丹、葉は一枚もなく花も一つがせい一ぱいで咲いているのが寒牡丹で、冬牡丹は沢山あったが、寒牡丹は咲いていたのは十数株にすぎなかった。どちらも風情があるが、寒牡丹は本当にいいらしい気がする。それにくらべると冬牡丹はまだ華やかで色気がある。

ところで、肝腎の政子石であるが、私は偶然それを発見した。まさに芦丈翁の書かれた通りの石だが、鶴が岡八幡宮に今もちゃんと保存されていたのだ。私は二十年ぶりで師匠に巡り合えたかのように懐しかった。本屋邸での私の立句。

政子石陽に艶めきて冬牡丹

明雅

連句に愛着する

山田 みづえ

正月前の気分と、ちょうど或るグループで連句を試みる
ことになっていて、東明雅先生のお電話があった時、威勢
よくお引受けしてしまったこのテーマ。暮のうちは、付句
かやり句にしてうまく逃れられそうに思っていたが、どっ
こい考えてみると、大変な命題だと気付いた。時すでに遅
し。

俳句雑誌は殆ど交換して読む形でどっさり月末近くに届
く。すべてに目を通せはしないが、気になるものはどうし
ても見る。「連句」もその一つ。第一、軽くて読みやすい。
軽量というのは頁数の話ではない。俳句とはちがう世界を
見渡せる広い窓なのである。

私にとって俳句は、今のところ、さしあたって退引きな
らぬ月刊誌刊行が控えており、自分の作品とは、静かな格
闘やぎりぎりの凝視とか、いつも重たい。この重たさは勿
論、魅力の一面であって、短さ、季語、切字、密度などの
制約があつて快よい緊張をもたらす。が、いつも張って
いる弓は切れ易い。時には脱出するというか、身を躲したい
気分もある。炊事や散歩はそういう折のリクリエーション
になるが、俳句以外の書物に親しむことも画を観たり、拙
ない筆をとることも、別な展開と寛ろぎを与えてくれる。

「連句」はその一端にある存在。物珍らしいというより、
『之元同根に生ず』即ち、俳句と連句は兄弟なのである。
むしる連句は兄、俳句は弟、いや叔父と甥という位か。連
句の人から言えば親元はこちらで、俳句は子孫と言いたい
かも知れない。連歌から言えばやはり兄弟に見えるかも知
れない。しかも現在は成長して、俳句は悠々と別天地を築
き、連句は盛んな時代を経て、一時衰微し、今や心ある人
々によって復興の歩みを踏み出しているという現状であ
る。

俳句の仲間、一度はこのことを告げる。「若し、俳句
を統ける気持があるならば、一度は連句を省みる必要があ
る」と。すると、必ず歌仙とはそも何者か、実地にやっ
てみたいという答がかえってくる。それで私は一時、俳句を
わきにかして、連句成立の概略と発句と俳句の関係など
を話して、大体、出勝ちで歌仙を巻いてみることにしてい
る。即ち俳句講座の中の必須科目の通過科目ということに
なる。この味を知らないで、俳句々と調子に乗ると上っ
調子の、現代詩の一行もどきの、人にはわからない文句の
ようなものでもよくなってしまふ。俳句を本然の俳句たら
しめる一過程に連句の洗礼が必要だとすら思うのである

が、俳句界ではどう考えるのだろうか。その逆の場合は私
はまだ考えていない。こういう連句の勉強仲間の一人の私
には「連句」は待たれる存在である。捌き方・味わい方・
ルールなどが、草創期の情熱で真面目に論じられる。或は
先覚の自伝(牛耳伝は非常に面白かった)など、私は吸収
する、つまり戴く一方であるが、編集が少し生真面目すぎ
ると、大体が怠け者だからそう思っているのである。

俳句は句会などを考えると、まさしく座の文芸ではある
が、作るときは独りである。孤独な密室的な作業であり営
みである。個の仕事といつていい。連句の方は一座するま
では各人別な道を歩き、そこまでは個かも知れないが、一
座すれば衆であり、連座、連帯することになる。俳句は作
品として発表すると、作者の思惑と異なる鑑賞がなされ
て、一句の余情も又どんな風にも波及し考えなされること
があり得るが一応一句独立の歩みをする。連句の方は、捌
きの考えで、取捨されてゆくし、前句が出ないと、考えて
いた句が成立することはまずないし、その場で生れ、そこ
で連なつて生れる別な世界は、予め考えているものとは違

うし、つまり予測出来ない未知のものである。個と他数、
一句独立と座の創造。現実・架空いずれをうたうにしても
俳句は自分のうたであり、作句過程は作者の胸中にある。
連句は連衆同志の何が生れてくるかわからぬ期待の中か
ら、独得の言葉による絵巻のような、創造するよろこび、
知的遊戯に近い秘かなたのしみがある。相反する性格をも
ちながら、「句」という形では著しく似ている。そういう
ことはよくわかっているが、近似ではあるが相似ではな
い。その上、連句の連衆には、連句復興の情熱があつて、
俳句への未練や愛着があるかどうか俳句と連句を共にやっ
ている人がいたにしても、少くとも悩みなどは聞いたこと
がない。俳句の方には迷いや悩みがいつも伴つて来るの
は何故だろうか。本卦返しをしてしまつて、俳句があやふ
やになりはしないか、面白すぎて本業が疎かになりはしな
いかと思つたりする。大悟徹底して、楽しむ境地になるに
は、道が遠いように思われる。色気があるからいけないの
だとも反省している最中である。

その迷いは、昔、ある正月、えらい人々と一座して半歌

山田みづえ集 自解一〇〇句選

俳誌「木語」主宰山田みづえさんが、昭和三十年から昭
和五十六年までの作品百句に、自注自解を加えられたも

の。作品のおもしろさはもちろん自解の語にも目をひら
されるものがある。昭和六十一年十二月刊。牧羊社・一
〇〇円。

仙を巻いたことがあった時以来のものである。

もう十年も昔になるなつかしいものだ。同席した故池田弥三郎氏が、開口一番「やあ、あなたは東北訛があるねエ、もっとも僕は江戸っ子の訛だけどねエ」これはその通りだからニコニコしていられる。矢つぎ早に「でもねエ、あなたは俳人だからなんだろうけど、俳句になってしまっねエ、どうしても」と言われる。これは肝に応えた。

捌きの井本農一氏も穏やか乍ら同意見のようであった。心しているつもりでも、発想はともかく抒情に流れる表現になってしまふ。かなりの道化者の筈の私も、学者の連衆の前に緊張していたのかも知れない。一応の恰好はつけたものの、連句の場合には、余程、心のスイッチの切換を鮮やかにし、融和力というか、素直に開放的になることが要求されると思い知る、よい経験になった。作家たちが歌仙を巻いた本が割によく出て、それなりに興深く拝見したが、「遊び」と銘打つ通りで、小説家の内蔵する隠し味がちらちら味わえる面白さというものである。以て範としていいかどうかは少し問題かも知れない。これも連句ブームの一態であろう。

このあたり、作家の責任ではなくて、連句の骨格というか構成の弱点じゃないだろうかといふ醒めた眼でみてしまふ。「遊び」と「文芸作品」の乖離なのかも知れない。

そんなに冷たいことを言うなら、連句などと無縁になつてしまえばよさそうなものだが、そう言い切れぬ縁が厳然とある。

誌を刊行している。俳句が好きだからやってゆけるのである。日本人が老齢になり、或いは子育てが終つたりして無我夢中の生活から、ふと自分に返って虚無感に襲われ、何かやりたいと思う。その時に「うたごころ」にそぞろ憑かれて短歌、俳句に入ってくるというのは、何だか泪ぐましいまでに和やかない傾向だと思う。こういう人々がいがり限り、やはり月刊誌をつづけなければ……と健気に？ 思い決めているので、出来ることなのである。人嫌いで、居眠り名人で情緒不安定の人がよく律気に続けている」というのが専ら友人間の評言である。本人もなるほどと我乍ら素直に頷く。その月刊誌の仕事と自分の俳句作品は心の別なところで生れる。俳句はひとりの心でなければ出来ないのは、分り切ったこと。混同したことがない。

話は元に戻り連句のこと。結論めいて言えば、私にとつて連句は昔から恋人で永遠にそうでありたい。愛着があり、ちょっと連衆になつて、何食わぬ顔で裏・名残りのあたりで羽搏いてみたい気もするが、シンパでいようとブレーキをかける。しかし、俳句の先輩としては、結社の中でも、集りの上でも、連句を通過儀礼のように一度ならず経験させたいと願っている。人と協調することも学ばし、面白おかしく遊ぶことに長けた人も出て来るに相違ない。連句好み、俳句向きとはつきり分れてみるのも一つの前進の結果になるに相違ない。それはそれでいいではないか。

大命題にしては拍子抜けの内容で申し訳ないが、これで失礼する。「連句」の良き一読者として。

(了)

今、私共の俳誌「木語」に『連俳好士伝』を連載執筆中の

の浜千代清氏は、連歌に於ける権威だが、私の父の最後の弟子にあたることになる。父は実際に連歌をやる最後（確言する資格は私にはないが）の人らしかった。小学生で「レンガ」などと知っている子は当時いないに相違なく私の眠る部屋の隣の十帖の父の部屋では昭和一けた時代、月に一回連歌が興行されていた。霜焼で痒い手を布団の外へ出してバタバタしたりすると、翌朝父に「昨夜はちと喧さかったぞ」などと言われた。夢うつつの中で「月の座は……」とか「そこにそんなものが出て来てはまことに困る……」とか複数の笑い声と欄間を洩れる灯影と紅茶の香りと匂いた香の名残りの揺曳する気配を「連歌」大人の遊びと承知してゆくような時代があった。「連歌概説」の中で、朶・栴・佛などの造字をした文化のしたたりを垣間見た驚きも新鮮だった。歌は挨拶として日本人の当然の営みに思っていた少女は、斎藤茂吉や与謝野晶子の姿を父の話の中に折々登場する人と認識しながらも、まさか俳人として一人立ちすることになろうとは思ってもいなかったのである。但し短歌でも俳句でも夏休みのあとなどは、友達の宿題を助けていくらでも代作引受け仕り候だったから、何でもなかったように詩歌は生れてくるものだった。連歌・俳諧の連歌・連句・発句・俳句と来ると、やはり私は連句には愛着があると思わずにはいられない。

俳句は、生来我儘な私に恰好の独りの世界形成に向く形式である。人嫌いだつた私は、今でも相当我慢して俳句雑

草間時彦著「夜咄」

俳人協会理事長草間時彦氏が昨年十二月出版された句集。同氏としては「中年」・「淡酒」・「桜山」・「朝粥」に続く、第五番目の句集であり、昭和五十三年春から五十九年春までの作品三二〇句を収めるその軽みの中に滋味のこもった作風が人を魅する。

エリカ咲くひとかたまりの濃むらさき

綱の目玉大切に食ひ花便り

(東京美術 定価 二二〇〇円)

三好龍肝 監修
金子恭子 著

「祭宿」

著者の金子恭子さんはホトトギス・冬扇・木兎などを経て、今は三好龍肝氏の慈眼舎・また都心連句会・山楽吟舎などに属する現代女流連句人の草分けであり、下町育ちの気っぷのよさ・才気煥発にして美貌という、三拍子そろった人、今度歌仙二十七巻を選び、各巻に寸論を付け、また、他に連句論三編を収録して出版された。都会人らしいセンスに溢れた楽しいこの連句集は、多くの人に愛読されるだろう。三好龍肝氏の寸論も垢抜けがしている。

(緑地社)

定価一八〇〇円)

「市中は」の巻 鑑賞(II)

東 明 雅

二番草取りも果さず穂に出て

去 来

灰うちたゞくうるめ一枚

凡 兆

(雑。鯛は雑。うるめ鯛は「をだまき」「通俗志」などでは十月・冬としているが、ここは一枚で乾物となり雑である。人情自)

(現代語訳) 二番草を取りつくさぬうちから穂に出るありさまで、田の草取りに追われ、昼食もそこそこ、うるめ一枚を炉であぶって灰をたたきおとし、飯をかきこむのである。

(付心) 其人の付け。其人の付けは有心の句が多いが、ここは会釈で、四句目ゆえに軽く付けた。

(付味) 「取りも果さず」の気ぜわしい趣と、この句の「灰打たゞく」の忙しい食事の有様が気分的に通う。響の付けである。

(転じ) 打越も付句も庶民の姿であるが、付句にある繁忙の気分、貧しさの気分は打越にはない。それと共に前句の気分とも微妙に変化している。

(補説) 伊賀上野の芭蕉翁記念館蔵の芭蕉真蹟「市中は」の巻には、この句が「破れ摺鉢にむしるとひいを(飛魚)」とある。これが初案で、芭蕉が斧正したのであろう。初案では貧しさだけで、農家の忙しさが全くあらわれない。灰は農家の象徴と太田水穂はいうが、その通りで、「うちたゞく」に貧しい中にも忙しい気分があり、また「うるめ一枚」で乾物である点がはっきりした。すばらしい添削である。

灰うちたゞくうるめ一枚
此筋は銀も見しらず不自由さよ
(雑。人情自)

凡 兆
芭 蕉

(現代語訳) ここは山国の辺鄙な街道筋で、うるめの干したのを直焼にして食べる有様である。旅人が支払いの銀を出しても、相手はそれを見知らぬというので、不自由なことである。

(付心) うるめの灰をうち叩き食事をする里人と、それに対する旅人の感懐を出した向付。尤も、旅人が「灰をうちたたいてうるめを食う」と見れば、其人の付けであるが、次にまた其人の付けが出るので、これは向付と見た方がよく、また、情景としてもおもしろい。

(付味) 太田水穂は響付というが、響の要素はすくない。また、能勢朝次は「前句の佗びしい余韻を感受したにほひの付けである」というが、これもすこし無理がある。浪本沢一が位の付けとしているのが最も妥当であろう。

(転じ) 前句、打越にあるのは、農村のいそがしく、また貧しい生活である。この付句はそこを旅する人を出したが、その口ぶりから見て都人であり、田舎者に対する優越感が感じられる。そこに大きな変化が見られる。

(補説) そのころ、辺鄙な村里に行くと、金貨や銀貨を見知らぬ人が多く、旅人が困った例は多かったようである。西鶴の「好色五人女・巻三」に京を駈落したおさんと茂右衛門が、丹波越の途中、茶店で休んで立去る時、「此嬉しさに、主の老人に金子一両取らしけるに、猫に傘見せたる如く、厭な顔付して、茶の錢置き給へといふ。さても京より此所十五里はなかりしに、小判見知らぬ里もあるよと、をかしくなりぬ」とある。旅の途中、小買物をする為

には、錢(銅貨)の用意が必要だったことはいうまでもないことで、当時、金貨や銀貨を両替えするには専門の両替屋があり、また両替屋のない宿駅では、旅宿で両替えをした。だから、この付合を、田舎の宿で宿代に銀貨を出したら見知らず困ったという解(婆心録など)があるけれども、それは実情にあわぬ解釈と言わねばならぬ。あくまで、道筋の茶店、あるいは民家に泊った場合などを想像すべきであろう。伊藤正雄は、前年に芭蕉が旅行した奥羽地方での体験かと言っているが、それもおもしろい。

此筋は銀も見しらず不自由さよ
たゞとひやうしに長き脇指
(雑。人情他)

芭 蕉
去 来

(現代語訳) この街道筋は銀も見知らず不自由なことだと高慢そうにいう男は、とつびょうしもなく、馬鹿長い脇指をさしている。

(付心) 其人の会釈の付け。其人の持物を描いた付け。

(付味) 能勢朝次は、前句の自負尊大な趣致から、その余韻で次の句が生まれた「うつり」であると言うが、「うつり」とまではいかずとも、前句・付句の何か非常識なところがかよひ合っている。

(転じ) 打越の「灰うちたゞく……」の貧寒で忙しい農村の気分は一掃されている。

(補説) 江戸時代、武士以外は帯刀を禁じられていたが、農工商の者も旅をする時は、護身用として脇指をもつことが許された。道中指という。脇指は一尺八寸が限度と

されたが、それ以上に長いのを大脇指（または長脇指）と言った。当時の町人は旅をする時は、みな道中指をさし、中でもちょっと派手で伊達な男は長脇指をさしたのである。だから、これを特に博奕うち、あるいは任侠の徒と見る必要はなく、むしろ、その気障な成金趣味を嘲ける意である。

別解として、逆志抄・秘註・幸田露伴・折口信夫・伊藤正雄などの註のように、この脇指を村の百姓がさしているとする説がある。これでは前句と一緒にした場合、その情景が不明瞭であるばかりでなく、打越から三句同じ場が続く可能性が強く、その点からも肯定できない。

婆心録は、伊勢参りの折、奈良で買った錫の銅金をまいた脇指を銀と思ひこみ、腰にさして歩くのを見て、旦那寺の和尚が、この筋は銀を見知る者もない物しらぬ所よと歎くさまというが、全く見当違いの説である。

以上で一応表六句を終った。全体の評は最後にまわすことにして、この表六句のみのおもしろさを味わってみるに、表六句は序の段であるから、穏やかにやるのが立前であるが、その穏かさの中にも特色と変化がはつきり出て、読む者を飽かせない。即ち、特色というのは、この序の段に庶民生活のリアルな描写が続ぎ、親しみを持たせているとともに、発句・脇の市中の雑沓と空の月の対比のおもしろさ、第三からは市中から田園に場所をかえ農民の貧しい、しかも豊作を予期した生々とした生活が、これも3と4とで気分が微妙に変化しながら描かれている。ところで

五句目になると、田園から遠い山間僻地の旅行者へと景がうつり、しかも「銀も見知らず」と旅人を通してその地の経済生活が偲ばれるのは、興味深いとともに珍しい。芭蕉の旅行した時の実感が句になったのであろう。そして6の見馴れぬ物に対する違和感が一種の滑稽感となって、次の句を生み出すのである。

たゞとひやうしに長き脇指
草村に蛙こはがる夕まぐれ
去来 凡兆

（仲春。蛙。人情他）

（現代語訳）馬鹿長い脇指をさしたからいばりの男が、夕まぐれ草むらの蛙をおそれて臆病の本性をあらわした。

（付心）其人の付。また、時分の付。

（付味）能勢朝次の指摘する通り、滑稽・臆病な感じの「うつり」。問のぬけた滑稽さが前句にあるので、それにあわせたユーモラスな俳味がある。

（転じ）打越に自負、尊大の気分があったが、この付句は露伴がいうように、「外敵にして内弱き世のおかしみ」がある。註解は「虚実を扱ひたる付方にて変化の活法なり」と言っている。

（補説）異説として、「蛙こはがる」という言葉の中に田舎人ならぬやさしい婦女子などの気配が感じられる。二句一連を画でも示せば、前句の脇指者は、さしずめ蛙こはがる人の小僕などの姿ともなろうと能勢朝次は言い、幸田露伴・沢本浪一などすべてこの説であるが、それでは前句の味としての滑稽が生けない。また一方、宮本三郎は、打

越から三句同一人も見られるが、打越は自の句、この付句は他の句で、それぞれ趣向も異なり変化もあるので、一句を挟んで、その前後に同想・同体の句を付けるを嫌う、いわゆる扉付の難はないと言えよう、と言っている。それにして、打越・前句・付句がやや気分的に通っている傾向にあるので、打越・前句からは滑稽の情をきっぱり絶ちきって、解釈する必要がある。

「蛙」はかわず・かえる、両方に読めるが、前者は歌語で古雅、後者は俗語で野趣がある。また蟻（ひきがえる・蝦蟇）は現在は夏の季語であるが、当時は普通の蛙と同様に春（二月）の季語となっている。こは「かえる」と読んで、意味は「ひきがえる」をさしているのであろう。「こはがる」は形容詞「こはし」の語幹に接尾語の「が」がついたもので、しきりに恐れる意で、枕草子などにも用いられ、俗語ではない。ともかく、俳味（滑稽味）のつよい、おもしろい付句である。

草村に蛙こはがる夕まぐれ
露の芽とりに行燈ゆりけす
凡兆 芭蕉

（初春。露の芽。人情他）

（現代語訳）行燈をもって夕暮時に露の臺を取りに出た女が、草むらの蛙がこわくてたまらず、驚いた拍子に行燈の火をゆりけしてしまった。

（付心）其人の付。人情他の句が三句続いているが、この時代はその点ゆるやかであり、他の会釈とも見られるで

あろう。前句を若い女性と見立替えしたのである。

（付味）許六の「俳諧問答」に、

一「猿みの」下巻俳諧云々、

前 草村に蛙こはがる夕まぐれ

露の芽とりに行燈ゆりけす

此句、「ゆり」の字、前にもたれてむつかし、「行燈さげ行」としたし。

とある。これは「こはがる」を「ゆり消す」と受けたところだが、前句にもたれて、「前句の情を引来る」（去来抄・修行）気味がある。それで、「露の芽とりに行燈さげ行く」と直した方が、離れてよいというのである。この許六の非難は尤もであるが、このように直しても、原因（蛙に恐れる）・結果（行燈をさげて行く）という事になりかねず、結局、十分に前句を離れたとは言えない。しかも「さげ行く」とした場合は、若い女性の嬌態が全く失われ、詩情が消えてしまう。

（転じ）前句にはべったり付いているが、打越とは全く離れ、転じている。それは前にもべた通り、「ゆりけす」の一語の力であらう。

（補説）露の芽は、露の臺のことであるが、これは当時の多くの歳時記には初春となっているが、花花草草・俳諧初学抄には仲春となっている。芭蕉はこれによったのだらう。

一月五日、初懐紙百韻の興行があつて、執筆を勤める機会が与えられた。当日は、「正式に準ずる」との事であつたので、いささかの緊張も止むを得なかつたが、何しろ、百韻を時間内に満尾せねばならないという気持が先にたつて、時間との戦と相成つた。朝十時十五分から夕刻七時半迄。途中休憩食事等に約一時間があてられたから正味九時間。治定を含めて一句平均五分の計算である。そうした慌しい中で私の経験に過ぎないので、甚だ雑駁な見方であろうが、思いついたことをメモしておくこととした。

捌きは本来、宗匠と執筆の共同作業である。執筆は、式目、作法について、点検をし、宗匠は文学的な評価をする。

執筆が担当する式目・作法は、ルールである。多くの付句の中から一句を選び出す予選の条件である。殊に百韻等の長時間に亘る興行の際は、まずこのルールをクリアしていない句は失格とする。事務的に分別することが出来る簡便且厳正な手段である。

今から三十年も前のことだが、勿論連句を知らなかつた頃、暇をもてあました友人四人で童話をつぎ足して作らうと言うことになった。一人の少女の成長物語である。どうなるかを楽しもうと言う遊びであつた。その際既存の童話の筋立道具立ては使わないと言うのが暗黙裡の協定となつ

た。今にしておもうのだが、人間は遊びをしようとする、必ず禁止の条件を作るもののようにである。連句の場合、式目は文芸の形式として連歌の踏襲であり、捌くと言う操作に於ては分別の一つの手段である。しかし、作る立場にとつては、ルールがある為に競争心をかきたてられる結果となり、面白味を一味濃くしているように思われる。

ルールがルールとしての機能を発揮する限りでは、なくてはならぬものであるが、余りに煩瑣となつてくると、連句自体の文芸性をそねるようになる。後に述べる全体の流れの上で、感興をそねぎ、一座を萎縮させることとなる。執筆は、ルールをよく知っていないければならぬ。しかし、式目の運用方法については、一座をよりスムーズに進める点で、柔軟な態度を持たねばなるまい。

歌仙等の場合は、通常捌き手は、宗匠と執筆の職能を兼行する場合が多いので、ここでは、その意味での「捌き」について考えてみることにする。

前句に対して、数人からの出句があつた場合、連衆各々は、各様の着想で前句の意向をくみとり、それぞれ趣向、意図で付けている筈である。捌き手は、まずそれを正確に受け止めた上で、優劣を定め、一句を選び出さねばならない。当然、そのためには、数句を没にするわけで、捨

てた句の中に実は別の観点からすればもっと面白い展開を見せる要素があつたのかもしれない。このことは、人生、

一人の人間が二つの道を同時に歩くことは出来ないと言ふ現実似て、因縁を感じざるを得ないのだが或一つの句を契機として、連衆が相呼応して興に乗ることもあるし、その句の為に、停滞してしまふことにもなる。捌き手は、その分岐点を握っているようなものである。時として、目をみはるような、格調高い句、感性あふれる佳句が出されることがあつても、それに惚れ込んだり、のめり込んだりするとはつつまねばならない。連衆の側からすれば、二句の渡りに執心して全体の流れを見失っていることもある。捌きは、その句の治定が今までの流れにどう働いているのか、又先々の在り方として、どう動いてゆくかの見通しをつけなければならぬ。

間もなく花と言う時に、残忍な句を治定しては花の句が出にくくなるだろう。緊迫した状況が続きすぎている時は、この辺りで一服しておかないと、次のパフォーマンスは生れて来ないだろうと想定してみる。三句先あたりで、山場が出来ればよいがと思つていても、その時になつて、格調高い句や、とびきりの美しい自然が出なければ、方針は即座に変更せねばならないだろう。従つて、どんな切替えてゆける柔軟さが必要となる。

捌くと言うことは一つのプロデュースである。或意味では権威である。従つて、連衆から見ても、横柄であつたり抑え込むように受取れるようでは、一座の雰囲気は険しいも

のにしてしまう。

捌きと、連衆との間には信頼関係がなければならぬ。連衆は、当日の進行を捌きに預けているとは言ふものの、無言の内に、自分の句が取上げられない不満を鬱屈させているかもしれない。それでも、他人の句が明らかに自分の句よりもよく、うまく付いていると納得すれば、捌きに対する信頼感を持つことも出来る。適度な競争心を満足させ、刺激を持たせながら、出来るだけよい句が出るような環境作りをせねばなるまい。連衆は捌きが公正な治定をすると言ふ信頼を持ってこそそのびのびと出句出来るのではなからうか。

信頼感と言へば、こんなこともある。佳句が出揃つて、さて何れに治定しようかという時、ふと迷の出ることがある。こうした迷いに対して、連衆は敏感である。ほんの一分か二分が捌きにとって大そう長時間に感じられるものだが、連衆にとつても同様である。迷つてはならぬと言いきかせても、迷が出はじめると焦るばかりである。その間私語雑談が聞えるうちはまだしも、ふと音が絶えて、連衆がじつとつめよつていっているように感じられると、一層のプレッシャーとなつて、迷つた場句にとんでもないものを治定してしまう。

頂きますと言って、上五を読み上げながら途中絶句、治定の撤回を申入れねばならぬ羽目となる。こんなことが度重なれば、信頼関係は自ずと薄れ一座の空気が乱れてしまう。連句一座は、常に連衆相互の拮抗するエネルギーが行き

亘って、しかも平靜でなければならぬ。

よい巻には、一つのまとまりがあるように思われる。それを創出することは、捌ぎの手腕だと思ふ。連句には筋立がない。従って一句一句は、筋立を表現する為の素材ではない。又、抽象的な一つの美意識を、句によって具象化しようとするものでもない。今日この巻では生の喜びを表現しようとするものと申合せて巻きはじめるというのではないのである。一句は各々独立した世界を持って、或意味ではスナック・ショットとして完結しているのである。

かりに、不特定多数の作者の長句と短句を数十句集め、誰かが捌ぎとして、連句の式目、作法に則って、連句の付味を以て三十六句並べるとする。それは、条件を事後的に与えてやるのだからおそらく完璧に近い作品となるだろう。「序・破・急」をつけると言われれば出来ないことはない。しかし、勿論之を連句と呼ぶ人はないだろう。その意味で、連句は付けて行くプロセスに本質があると言えらる。前句と付句の間には丁々発止とわたり合った気迫のようなものがある筈である。激しければ激しいなりに、静かな付味はそれなりに。

そう言った一つの緊張感を留めている一巻にすることが

武翁賞作品募集

捌ぎの機能であると言えるのではなからうか。一つのまとまりと言ったが、安定した空間とでも表現しようか。勿論、安定と言っても、決してすべてが均質であるとか、シンメトリックであるとかステティックであるとかいうことではない。或るところは非常に密度の濃いところがあり、強さがあり、大きな断絶ありながら、ダイナミックなバランスを持っているものである。更に言えば、そのようなバランスを得ようとして動いてゆく動きそのものの緩急が一つの美を生み出している状態である。

連句の世界については様々に言われる。しかし根本的に何を表現するのかと言われれば、

「人間と、それを取巻く万象にかぎりない関心を持ち、愛着を持ち、人間が生きていることをいろいろな面から見、表現しようとするもの」

と言いたい。そして、それは一人で想うのではなく、百人百様の見方感じ方を、寄り合い話し合うことである。連句と言ふ形式が好都合にマッチするのである。

捌ぎはこの基本的なことを前提として、連衆の句を一巻の中にまとめあげてゆく仕事なのだと言ふことを忘れてはならないように思う。

作品は歌仙または二十韻だが、そのやり方は自由、九月十日(木)までに呈出されたい。

応募作品は「武翁賞応募」と朱書すること。

暮雨巷のこと

式田和子

「心ここにあらざれば見れども見えず」この諺は至言だと思ふ。

暮雨巷。天明期の俳人、久村暁臺の居処木造平家建。主室八帖、次室六帖、玄関六帖の三室が暁臺時代からのもの(現在は建増して広くなっている)。切妻造、棧瓦葺、庇付。

現住所 名古屋市瑞穂区陽明町二丁目四番地。

株式会社東海銀行所有。愛知県指定有形文化財。

「田辺通り」でバスを降りると見上げるような高い石垣がある。これが暮雨巷の裏側で、垣に添ってぐるりと回ると正面入口現在玄関になっているのはガラス格子引戸で、開けるとずっと通った土間・古い名古屋の商家造りで、この土間を中央にして右に三部屋。左が暁臺時代の部分に建て増した茶屋等があり、つき当りが台所。

暮雨巷は、もともとは中区大池一丁目、いわゆる前津の龍門園という広大な庭園にあり、野村氏の別荘であったが、荒廃して

いたのを暁臺が求めて修理を加え住んだもので宝暦年間(西暦一七五〇年代)と思われる。暁臺遍歴の間は母と妻が住んだといわれている。庵号としての暮雨巷は四世迄受け継がれているが住むの方は、文化のはじめ、水口屋伝兵衛が持つて以来持主は何人か変った。大正初年、新道路開通にかかるとこの建物を中村貴之助氏が現在地に移築し、その面影を残しつつ増築されたものが現在の形である。幸に戦災にもあわず約二百五十年前の旧態を遺存しているのは喜ばしいことといえよう。暮雨巷の名は、この主座敷を廻る回廊からの景色がまことに見事であったが、特に暮雨の景に秀れているからという。

昭和二十二年、財産税、新門切替等の為、暮雨巷は東海銀行の所有となり頭取・鈴木亨市がこの家に住まうことになる。室内の汚れを修復する程度で二百五十年前の形に手を入れることはなかった。冬寒、夏暑の家であったが、この家をこよなく愛し、約十六年をここに過した。

鈴木亨市は私の亡父である。

まことにうかつな事ながら、長い間、暮雨巷は私にとって里帰りする実家そのものでもしかなかった。東明雅先生に連句をお習いするようになって、連句関係の本も読むようになり、安東次男の「風狂始末」別冊に、「くだつて安永・天明のころ俳諧中興の機運に際して暮雨巷暁臺がいま一度貞享蕉風の光を蘇らせようとしたのは、かれが名古屋俳人であったから」云々、とあるのにびっくり。名古屋の暮雨巷といえはあそこしかないが、もしや、まさか本物であった驚きはいうまでもない。心に俳句がなかった為見えなかったことを見せてもらった因縁は不思議というほかはないが、明雅先生に感謝でいっぱいである。

亡父生存中にもっとよく知っていたらよかつたかとも思うが、両親が暮していた頃暮雨巷に帰ったときは、めいっばい親にならずに過したただけの日々を、いささかも悔ゆることはない。

参考資料、暮雨巷(東海銀行) 東海の俳諧史(さるみの会編) 衛師の華(財界名古屋) 中興期俳諧の研究(桜楓社) 暮雨巷暁台の門人(愛知学院国語研究会)

1 捌きが満尾した連句を見直すと、思い掛けないミスをしているのに気付いて、加筆、添削をする。この作業、校合は去嫌、文字その他の点検、全体の見直し等、作品の精度を高めるため、どこでも実行されている事である。作品のよしあしは捌きの責任だから、捌きは気のすむまで、存分に校合すべしというのが通説である。

その通説の根拠は芭蕉がそうしたからだという。その例として、『去来抄』の「先師評」の元禄三年秋、大津膳所の水田正秀亭の俳席の逸話が挙げられる。

その折の芭蕉の立句は残ってないが、正秀の脇句
二つにわれし雲の秋風

につけた去来の第三

竹格子影もまばらに月澄みて

を芭蕉は、「のびやか」で脇句の「はげしさ」に対応して
いないと断じ、

中連子中きりあくる月影に

と直したという。

また「先師評」には

田のへりの豆つたひ行螢かな
の凡兆の句を芭蕉は

田の畝の豆つたひゆく螢かな
と直し、作者名を伊勢の万乎として『猿蓑』に入れた話も
のせている。

これは宗匠は弟子の発句をも自由に直し、作者名を取換
へてもよいという例に挙げられている。

2 この正秀亭の一年前、山中温泉滞在中の「燕追行」歌仙
興行に芭蕉の指導、添削の跡を北枝が書留めた次の一節に
注目したい。

手枕にしとねのほこり打ち払ひ

翁

うつくしかれとのぞく覆面

北枝

つぎ小袖薫売の古風なり

翁

此句に次四五句つきて、しとねに小袖、気味よから
ずながら、直しがたしとて、其儘におき玉ふ。

「小袖」は「褥」の打越になるからまずいと気がついた

が、もう四、五句進んでいるから、「直しがたし」と云っ
て直さなかった。

これは一座の興を重じたからと思う。

3 近頃は捌ける人がふえてきたので校合の行過ぎという例
もでてきている。留字、同字の手直しくらいならよいが、
一座した手控の草稿と校合した作品を較べてみると、二、
三の句があとかたもなく直されている場合がある。その直

し方がよくなっている場合はよいが、その反対の場合もあ
って閉口した経験をもたれた方も少なくないと思う。
三百年前の師弟間では普通とされた校合のやり方も、自
我意識に目ざめている連衆の集う現代の俳席では一考を要
する。問題は一座の興を第一とするか、作品第一主義とす
るかだが、これは勿論一座の興を第一とする校合を考える
べきではあるまいか。

杉江杉亭著 二十韻 井の頭集

杉江杉亭氏はA・C・Cの第二期生の一
人で猫藪会の最有力のメンバーの一人であ
る。お酒を好み、お洒落で、ユーモアに溢
れた魅力ある人柄と、「脇の杉亭」と異名
を持つ達者な力量とは周知のところである
が、その杉亭氏が五十八年六月ごろから、
奥様やそのお友達と家庭連句を楽しみ、六
十一年九月分までの十二巻を纏めたのが、
この「井の頭集」である。新しい形式の連
句集を先がけて作られたところには、苦心
のあとが多く、参考とすべき作品集である。
杉亭氏の労を多とし、心から慶賀する次第
である。(昭和六十一年十二月二十四日刊

行。非売品。希望者は三鷹市井の頭二二二
六一三〇同氏宅へ)

知足庵一海著 やせ蛙の旅

徳島市の郊外羽浦町に生まれる知足庵一
山一海宗匠は、明治三十八年の生まれ、先
に「喜寿の葉」・「傘寿連句集」を出版さ
れたが、今度は俳句・自伝、歌仙作法、及
び実作四十巻を掲載した「やせ蛙の旅」を
出版された。一海宗匠は全国の俳諧師と交
流があり、私の師匠根津声文翁からも教え
を受けられたので、いわば私と同門である
が、人格・識見ともすぐれ、若い時苦勞
されただけに世事・人情の隅々まで知悉さ
れ、本当に畏敬する兄弟子である。そのこ

とは作品を熟読されれば、自ら理解される
ところであろう。また、同氏は御結婚以来
六十年になられるそうでお二人のお写真が
載っているのはほほえましくおめでたい限
りである。益々御自愛、御加餐あって、な
お末永くお侍せをお祈りする次第である。

句集皆之(みなもの) 金子兜太

昭和五十六年から六十年までの行住坐臥
の日常吟。造語「皆之」は郷里の「皆之町」、
現住所の「上之」、夫人の名「皆子」、しかも
手拍子も盛んに唄う歌「皆之衆、皆之衆」
に通じる。

立風書房 定価二六〇〇円 千三〇〇円

